

[論 文]

日本人形成に及ぼした大乘仏教經典の人間形成的意義

—法華經を中心として—

土 井 進^{*}

要 旨

仏教は本来、自ら悟る自利行と他の人に手を差し伸べる利他行が説かれたものである。そのため、人間形成についての深い叡智に満ちている。筆者は、利他行を実践する菩薩の姿、すなわち菩薩道こそが広い意味で、仏教の教えと人間形成を担う教育とを結ぶ象徴であると考えたものである。大乘淑徳学園の創立者、長谷川良信とその恩師、渡邊海旭は、共に大乘仏教研究の碩学であり、大乘仏教精神の実践者として高い評価を受け、かつ教育実践者でもあった。

筆者は唐澤富太郎（1911-2004）の「聖徳太子と『法華義疏』」の講義を聞いて唐澤に師事し、仏教と教育の研究に取り組んだ。そして高橋俊乗の論文「世俗教育の教科書として用ひられたる法華經」に出会い、法華經經典による人間形成の意義を明らかにするために『大日本国法華經驗記』を分析した。その結果、大乘仏教經典のもつ人間形成的意義は、經典が内包する経力、すなわち功德力と人間の側における信力・行力が相互に作用し、感応道交することによって、修行者をして誠の人格にまで高める働きを有するところにあることを論述した。

Key words：長谷川良信，渡邊海旭，唐澤富太郎，聖徳太子，一大乗思想

I はじめに

筆者は、縁あって学校法人大乗淑徳学園において、淑徳大学人文学部の教職課程を担当して5年になる。また、総合福祉学部において「教育学概論A」の講義を担当して5年になる。「大乘」の名が冠せられた大学で教育研究活動に精進できることは、筆者のこの上ない誇りであり、喜びである。筆者はかねてから仏教に込められている人間形成的理念に関心を抱いてきたが、これまでに「仏教と教育」に関する論文を1本も書き上げることができていない。幸いなことに平成30年8月27日（月）～28日（火）に行われた第12回大巖寺研修への参加を契機として、本稿を執筆する決意を固めることができた。

※ 淑徳大学人文学部教授

1. 大巖寺研修での僧堂教育の体験

大巖寺は1551（天文20）年に浄土宗の高僧・道誉貞把上人（1515–1574）によって開創された。第2世安誉虎角上人は、徳川家康公とも親交が深く、江戸時代には関東十八檀林の一つに指定され、僧侶の教育機関として学風が大いに振ったといわれる。

大巖寺研修では、本堂での開講式・オリエンテーションのあと直ぐに、学祖長谷川良信の墓参に向かった。境内の高台にある立派なお墓に線香をお供えしながら、淑徳大学で教育学講義を担当できることへの深い感謝の念を捧げた。

墓参のあと、書院と呼ばれる広い講義室で仏教の講話が始まった。書院の襖には徳川家の家紋である「葵の紋」がいくつも描かれていた。かつて学僧たちがこの書院で真剣に研鑽したであろう光景を思い浮かべながら、2日間で6座の仏教講話を聴聞した。講師の吉水岳彦師は新進気鋭の仏教学博士で、音吐朗々たる明快な講義は、皮膚の穴から染み入るようであった。また、1歳年下の金田昭教師は、自己の仏教研鑽の体験を赤裸々に語り、祈りの大切さについて力説された。6座の講話を通して大乘仏教の根本思想を初心に帰って学び直すことができた。筆者が仏教講話の中で最も深く領解したことは、“こころ”は“かたち”となって現れるということである。とりわけ合掌の姿には、相手に対する恭敬の“こころ”が“かたち”となって現れている、ことが深く心に残った。また、^{じきさほう}食作法における「食前のことば」と「食後のことば」の朗読によって、食事をいただくことへの深い感謝の念が湧き、自ずと合掌の“かたち”が現れた。

2. 我が家にあった一書「お経」による人間形成

2日間の僧堂教育において、何度も大乘仏教經典である「般若心経」を読誦する機会があった。1948（昭和23）年に富山県立山町の農家に生まれた筆者は、仏典を手にするたびに思い起されることがあった。それは、家に書無きは、人に魂無きが如しと言われるが、幼少の頃の我が家には、1冊の書物も無かった。およそ学問的雰囲気や文化的雰囲気とは縁のない農家の生活であった。しかし、敢えて家の中に書物がないかと探したときに思い当たったことは、唯一仏典があったことである。祖母が毎朝のお勤めをするとき、その仏典を押しいただいてから、漢字で書かれたお経を読誦するのである。無学の祖母の人間形成に深く関わり、生きる力となり、信念を形成していたのが「お経」という一書であった。手垢でよれよれになった經典を押しいただいて経机の上に置いて読経は終わる。するとお供えした仏飯を下げて家族そろっての朝食となる。筆者はこの仏飯をいただくのを楽しみにしていた。

幼少期のこのような仏教体験が、後年、仏教のもつ深い人間形成的思想を離れて日本人の精神形成はあり得ないと考えるようになり、「教科教育」の道ではなく、仏教哲学の叡智を基盤とした「教育学」研究の道を志すようになった。

Ⅱ 長谷川良信と渡邊海旭における大乘仏教經典の研鑽と教育実践

1. 長谷川良信における菩薩道の実践と大乘淑徳学園の建学

大乘淑徳学園の淵源は、学祖長谷川良信（1890-1966）が1919（大正8）年に「マハヤナ学園」を創立し、自ら園長となったことを起源とする。「マハヤナ学園」の名称は、長谷川良信の恩師・渡邊海旭（1872-1933）によって命名された。（長谷川匡俊 1992：67）

マハーヤナとは、梵語māhāyānaの音写で、「大乘」を意味する。大乘には、勝れた教えの乗り物に乗せて、多くの人々を悟りに導くという意味が込められている。長谷川良信は大乘仏教經典の深い研鑽によって修得した菩薩道の精神を、社会事業と教育実践において展開した。彼はその生涯の宿願であった淑徳大学の開学式（1965（昭和40）年）に臨んだときは、病身をおして抱きかかえられるようにして出席されたという。まさに長谷川良信は大乘仏教者であるとともにその生涯を教育に捧げた教育者であったといえよう。

2. 淑徳大学歌に結実された長谷川良信の菩薩道の精神

宗教という永遠性に連なる思惟と教育という現世における人間的営みは、次元が異なっているといえる。然るに次元の異なる両者を繋ぐ論理はどのようにして見出されたのであろうか。仏教は本来、人間形成についての深い叡智に満ちている。この仏教の叡智を人間観として探究することによって、仏教の教育観を明らかにする道も自ずと開かれてくる。そして、仏教の人間観・教育観に見られる究極の姿こそ菩薩道であると考えられる。大乘仏教者であった長谷川良信の止むにやまれぬ菩薩道の実践こそ、社会事業への献身と淑徳大学を初めとする大乘淑徳学園¹⁾の創立であったといえよう。

仏教と教育が、菩薩道によって見事に結ばれていることを表現しているのが、長谷川良信の作詞による淑徳大学歌である。その一節に

「実学4年 勇者我れ 未来を開く 菩薩道」,

「弘誓の力 身にこめて行学一致 晏如たり」(『淑徳大学50年史』:43)

と謳われている。まさに学祖自身が菩薩道の精神を身にこめて、行学兼備の実践により未来を切り拓かれたのが大乘淑徳学園であったといえよう。

3. 渡邊海旭における大乘仏教經典の研究と教育実践

長谷川良信の恩師、渡邊海旭もまた、大乘仏教經典の一代の碩学であるとともに、芝中学校の名校長として22年間教育実践に従事し、大きな教育的影響力を及ぼした。この2人の師弟は、大乘仏教經典の研鑽によって修得した菩薩道の精神を、教育実践の場において具現化した点において共通しており、共に仏教界・社会事業界・教育界に不朽の功績を残した。渡邊海旭の胸像は、淑徳大学人文学部の4号館に安置されている。

渡邊海旭の人間像について、教育学者唐澤富太郎が『教育人物事典』中巻において詳述している。その中からドイツ留学による仏教原典の研究と芝中学校長としての22年間の教育実践に関する箇所を参照（唐澤富太郎 1984：190-199）するとともに、渡邊海旭『壺月全集』上下に基づいて次に紹介する。

(1) ドイツ留学と仏教原典の研究

渡邊は1900（明治33）年5月、宗命によって第1回の海外留学生としてドイツに留学し、11年間滞在した。彼は11年間の留学中、まずカイザー・ウィルヘルム二世大学（ストラスブルク大学）に入学し、主としてロイマン教授に師事し、ポイムケル、グラントなどについて梵語、巴利語、チベット語など、仏教原典の研究に必要な言語を研究し、それからこれらの語学を駆使して、比較宗教学の研究に進んだ。留学中に発表された論文は欧文8編、和文26編にものぼった。いずれも該博な知識と鋭い観察力によって論述されたものであって、日本のみならず、欧米の仏教界にも新風を巻き起こすものであった。1907（明治40）年、『普賢行願讃』諸本の比較研究によってドクトル・フィロソフィーの学位を受け、1910（明治43）年に帰国した。

渡邊の名著で邦文唯一の著書は、『歐米の佛教』（大正7年）（渡邊海旭：1-191）であり、論文は50余編に達する。さらに大きな学問的功績は、『大正新脩大藏經』の刊行である。かれは高楠順次郎とともに都監としてこの事業に臨んだ。この事業は1922（大正11）年5月に始められ、彼は主として増上寺における三大蔵の校合を監修し、高楠順次郎は、聖護蔵や宮内省図書寮などにおける校合を監修した。1924（大正13）年4月8日に第1巻を刊行し、1932（昭和7）年5月、正統合わせて全85巻を完成した。渡邊は、学徳兼備の「一代の碩学、稀世の高僧」「高德碩学の傑僧」と評された。この完成の翌年1月、朝日賞を受けたが、彼はこの朝日賞受賞のときには危篤状態で、意識不明であった。

(2) 大乘仏教の精神を貫いた生涯

1933（昭和8）年正月元旦、暮から病床についていた彼は、この朝、例年と同じように、4時半になると起床し、身を^{きよ}潔め、法服をまとい、仏前において修正会を行うこと2時間、それから燕尾服の正装に着替えて、芝中学校長としての新正の儀式に出ようとした。これに対して、門下生たちは極力止めたが、彼は敢然として「校長として元旦の正儀に欠席しては、新正の儀式は全く意義を失ってしまう。僕はこの20幾年来、いまだかつて1回も新正の儀式に欠席したことはない」と出ていった。しかしそれが無理となって、ついに死の床につき、同年1月26日、61歳で生涯を閉じた。

1933（昭和8）年12月に壺月全集刊行会の編纂で渡邊の号を冠した『壺月全集』が大東出版社から刊行された。この全集の刊行に尽力された方々への「感謝録」の中に、森岡常蔵（東京文理科大学長）、姉崎正治（東京帝国大学教授・法華経研究者）、今岡信一良（正則学園校長）の名が記されている。

渡邊の一生はまさしく大乘仏教の精神をもって貫かれ、自己の信念に殉じた生涯であったといえよう。彼は一生を独身で通し「女房をもらう金があったら、それで学生を養います」と言い、「貧乏と労働のために、僕は結婚する暇と縁と徳がなかったのです。僕は、人間としては失敗者だ」と言っていた。しかし彼は、他の人に対しては僧俗あわせて100組を超える結婚の媒酌をした。また1932（昭和7）年還暦を迎えた時、門下生や知友をはじめ、仏教界はその祝いを望んだがこれを断固として辞退した。

(3) 22年間の芝中学校長としての教育実践

1911（明治44）年9月、彼は芝中学校の校長となった。そしてその傍ら巣鴨家政女学校、同女子商業学校、大乘学園などの創設もしくはその発展に寄与した。芝中学校の前身は、私立浄土宗第一大教区宗務学校といい、1887（明治20）年、浄土宗管長によって設立され、もっぱら浄土宗内の徒弟に高等普通教育および宗教教育を施してきたのであるが、1906（明治39）年文部大臣の認可を得て芝中学校として発足し、一般の子弟の訓育にあたることになったのである。

当時の芝中学校は、麻布、開成と並んで東京私立三名門の一つであった。第2代校長であった仏教梵語の開拓者荻原雲来の後を継いで、渡邊海旭が第3代の校長となった。彼は1911（明治44）年から1933（昭和8）年に至る22年間、校長として33名の職員と共に教育に尽力し、生徒に与えた教育的影響力は、実に圧倒的なものであった。

(4) 渡邊海旭が制定した校訓「遵法自治」

彼が芝中学の校訓としたことは「遵法自治」であった。彼によれば、自由とは遵法と自治とが完全に融合し一致した、最高の文化と平和を意味するものである。知徳進歩の結果、自己の自由意志が自然に道徳法に合するようになる。孔子が「心の欲する所に従って矩を越えず」と言ったのは、すなわちこれである。したがって、個人としては知徳の修養に努力し、自治の能力を十分に発揮し、自己の天分をできるだけ進展させて独立自尊の真価値を示し、国家としては光栄ある独立の誇りの下に精励勤勉、経済的にも学術的にも完全に独立して、外貨や模倣から解脱し去り、東西思想融合の^{おおほた}大旗を掲げて新文化の指導者となり、世界平和の雄鎮をもって任せねばならない。これがすなわちわれわれの理想とする最高の幸福であり自由であるとしている。

なお彼は『芝中学校友雑誌』（昭和5年1月）において、卍字を説明して、卍は4つのLが上下左右に組み合わされて成り立っているとしている。この4つのLとはLight（光明）、Love（愛）、Life（生命）、Liberty（自由）を意味するものであって、これらは現代人の理想として、宗教記号として最高の表示であるだけでなく、現代生活の規範としてこれほど適切なものはないと説明している。しかもこれは仏教のみならず、キリスト教、神道、いずれもこの4つを主眼としないものはないと述べている。Lightは「理知」を意味し、光明である。徳操は「仁愛」Loveを基礎とする。この知徳の進歩するだけ、われわれの自覚は強烈となり確実となって、その結果充実した「生活」Lifeが輝きを増し、そこに幸福がもたらされる。この完全な幸福とは、これすなわち「自由」Libertyにほかならないとしている。

Ⅲ 教育学者 唐澤富太郎の「聖徳太子と『法華義疏』」の講義

1. 唐澤富太郎の講義に感動して師事する

大乘仏教の精神が横溢している淑徳大学の本務教員として勤務している今が、「仏教と教育」に関する論文をまとめる時であると自覚し、本稿の執筆を開始した。

筆者は富山工業高校機械科に学んだが、“物づくり”の道には不適格であることを自覚し、“人づくり”の教育の道に志を立てた。教育の道といっても「各教科」の教員になる道ではなく、人間形成それ自体について学びたいと思い、教育学科を専攻した。

東京教育大学に入学して最初に受けた講義が、唐澤富太郎²⁾の「聖徳太子と『法華義疏』」と題する講義であった。その講義の中で特に脳裏に焼き付いたことは次のような言葉であった。(唐澤富太郎 1984 : 6-7)

「聖徳太子の人性観（ママ）は太子の中心思想である一大乗にある。一大乗とは、小乗に対する相対的な大乘ではない。それはいわゆる大乘と小乗とを超えた意味をもっているものであり、太子は常に中間的な存在を乗り越えて、直ちに無限絶対である第一義諦に迫っていくとしたのである。この太子の究竟的一への迫り方を特によく示しているのは「法華義疏」総序であり、その草本を見ると「一大乗」という熟字のうち「一」という字は、あとから太子がわざわざ添加したもので、ここに太子の特殊な心持が示されている。一大乗思想というのは、いっさいの人類をことごとく一仏果に至らしめる真実大乘ということである。すなわちこれによって、いかなる者もみな絶対平等に救済され、等しく往生し、成仏得度することができるということを説く法門という意味である。」

唐澤は、『法華義疏』の複製本を我々新入生に見せて、「一大乗」とわざわざ「一」が書き加えられているところを示し、聖徳太子直筆の『法華義疏』の文字は、初めから終わりまで同じリズムで書かれていて、少しもくたびれた様子が見られないこと、ここに聖徳太子の王者の風格がうかがわれる、と渾身の力をこめて講義された言葉が今も脳裏に焼き付いている。この講義を受けた筆者は、この先生のもとで教育学、就中大乗仏教の哲学に裏付けられた菩薩道としての教育学を学びたいと思い、唐澤富太郎に師事することを決めた。

2. 恩師唐澤富太郎のもとで儒教と仏教の研究

日本教育史の研究を進めるに当たって唐澤に相談したところ、次のようなアドバイスを受けた。「日本人の形成に大きな影響を及ぼしている儒教や仏教について研究することは極めて重要である。しかし、仏教の研究は難しいので、まずは儒教と教育について研究し、次に仏教と教育の研究に進むのがよい。」と。こうして土井進(1971)「貝原益軒にみる儒学の教育理論への具体化」(卒業論文)をまとめ、それをもとに唐澤富太郎編著『教育人物事典』上巻の「貝原益軒一子女の教育法を説いた「和俗童子訓」の著者一」(土井進 1984 : 148-152)を執筆した。さらに

「英国人外交官 W. G. アストンが高く評価した貝原益軒の道德教育論の特質—“A HISTORY OF JAPANESE LITERATURE”を資料として—」（土井進 2017：107-114）を発表することができた。

儒教と教育に関する研究に一段落をつけ、いよいよ仏教と教育の研究に移るに当たり、唐澤に法華經について研究したいと相談した。すると唐澤は、「土井君が法華經に挑戦するというのは、子どもが横綱に体当たりするようなもので、とても難しいことだが若い時に難解なものに体当たりしていれば間違いがない。絶対に損をすることはない。思い切って体当たりしなさい。」と激励された。こうしてひとまず仏教と教育についてまとめた論文が、土井進（1975）「日本人の形成に及ぼした法華一乗思想の教育史的考察—特に『法華驗記』を中心として—」（修士論文）であった。

その後、中学校社会科教育の実践的研究（14年間）、教員養成学部における実践的指導力養成のための臨床経験科目の体系化の研究（22年間）に取り組んでいる間は、全く仏教と教育の研究から遠ざかってしまった。しかし、淑徳大学人文学部に勤務し、大学と唐澤博物館の博学連携が再開されたこの機会に、大学院時代の初志に立ち返って論文執筆に挑戦することにした。

Ⅳ 法華經經典のもつ人間形成的意義

1. 一大乗の思想を明確に説いた四仏知見

古来、法華經は諸經の王と呼ばれ、一切の人類をことごとく一仏果に至らしめる一大乗の法門であるとされる。このような一大乗の思想を別の表現で説いたのが、次の法華經方便品第二の四仏知見であるといえよう。

「諸の仏・世尊は、衆生をして仏の知見を開かしめ、清浄なることを得せしめんと欲するが故に、世に出現したもう。

衆生に仏の知見を示さんと欲するが故に、世に出現したもう。

衆生をして、仏の知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。

衆生をして、仏の知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。舍利弗よ、これを諸仏は、唯、一大事の因縁をもつての故にのみ、世に出現したもうとなすなり。」（法華經上 1962：90）と。

すなわち、一切衆生の中に仏知見が本来存在していることを認め、その仏知見を「開・示・悟・入」することが仏の一大事因縁であると示している。このことは、従来の仏教思想においては、女人や悪人、二乗は成仏できないとされていたのに対し、すべての人間の平等観に立った革新的な思想であるといえる。この四仏知見の思想は、仏が「一切衆をして、我が如く等しくして異なること無からしめんと欲する」（大正新脩大藏經 1925 第9巻：8）と説法されていることによつて更に明らかである。

法華經において説かれた一大乗の思想は極めて宗教的なものであると同時に、また極めて教育

的な意義を持った平等観であるといえる。われわれはこの教育的な観点から法華經という大乘經典が人間形成の上にどのような影響をもたらしているのか、について考察することにしたい。

2. 法華經の諸法実相の哲学の人間形成的意義

法華經の根本思想として、開示悟入の四仏知見とともに諸法実相の哲学がある。諸法実相は法華經方便品第二に次のように説かれている。

「仏の成就せる所は、第一の希有なる難解の法にして、唯、仏と仏とのみ、乃ち能く諸法の実相を究め尽くせばなり。謂う所は、諸法の是くの如きの相と、是くの如きの性と、是くの如きの体と、是くの如きの力と、是くの如きの作と、是くの如きの因と、是くの如きの縁と、是くの如きの果と、是くの如きの報と、是くの如きの本末究竟等となり。」(『法華經』上 方便品第二：68)

この諸法実相の法門は最も難解であり、よく理解することは困難であるとされている。試みに筆者の捉えた「諸法実相」とは、諸々の事象や現象には必ず本質が備わっている。事象や現象の奥に別に本質があるのではない。また、実相という本質を離れて事象や現象が単独に存在するのではない。つまり、諸法に即して実相があり、実相に即して諸法がある、と考えられるのである。人間形成の観点からは、今ある姿がたとえ欠点の多いものであったとしても、そこから離れて別の人間像を追い求めるのではなく、その欠点をありのままに受け止め、それを脱皮して自己変革することによって自己実現の道が開かれるのだと考えられる。

3. 法華七譬と長者窮子の譬

諸法実相のように哲学的な普遍性が説かれた法門は難解難入であるので、民衆に法華經の教えを受け入れやすくするために様々な比喩が説かれた。その代表的なものは法華七譬と呼ばれる三車火宅の譬、長者窮子の譬、三草二木の譬、化城宝処の譬、貧人繫珠の譬(衣裏珠の譬)、髻中明珠の譬(頂珠の譬)、良医病子の譬である。いずれも衆生の心の中にかげがえのない仏性が備わっていることを自覚させる譬である。このうち長者窮子の譬(『法華經』上、信解品第四：242-262)の概要を、文献を参照して次に紹介する。

ある長者の息子が、幼くして家出をし、諸国を流浪した。長者は息子を諸方に探し回ったが見つからず、ある城にとどまり、そこに住した。長者はそこで限りない財宝と大勢の召使に囲まれて暮らしていた。放浪をしていた息子(窮子)は五十余年の後、職を求めようとして、父のいる城に来たが、余りに立派な長者の姿を見て、父と分からず、国王か、それとも同等な人であると思い、恐れて逃げだしてしまう。この様子をみていた長者は、それが自分の息子であることに気づき、家来を遣わして窮子を連れ戻そうとするが、窮子は殺されるものと思い込み、気絶してしまう。長者は息子の心が卑しくなっていることを知り、風采のあがらない家来を遣わし、糞穢を掃除する仕事に誘わせたところ、窮子は長者の家に来てまじ

めに仕事をするようになる。長者は次第に窮子を家の中に入出入りさせるようにし、二十年を経て、長者の財産を全て管理させるまでになった。しかし、窮子はそのような身分になっても門外に住み、草庵にとどまって、自分には財産などないと思っていた。やがて臨終が近づいたことを知った長者は、親族、国王、大臣を集めて、窮子が自分の息子であることを明かし、全財産を息子に与える。窮子は願ってもいなかった財宝を得て、歓喜する。

この譬で長者とは仏、窮子とは民衆をさしており、名もない民衆の生命にも仏性が備わっていることを示していることを分かりやすく譬えている。

V 法華経を世俗教育の教科書として捉えた高橋俊乗の実証的研究

1. 世俗教育の教科書として用ひられたる法華経

京都大学を卒業し龍谷大学で教鞭をとった高橋俊乗（1892-1948）は、教育史を教育思想史又は教育学説史と教育実際史に分け、自らの教育史研究の立場は後者の教育実際史にあるが、「教育実際史では、専門にこれを研究しない人には、耳馴れぬ感があるやうであるから、教育文化史と称するのよからう。」（高橋俊乗 1933：6）と述べ、日本教育文化史の立場から古代から近世に至る仏教教育史研究に多くの業績を残した。

高橋の仏教と教育に関する代表的研究が、「世俗教育の教科書として用ひられたる法華経」である。これは「世俗教育の教科書とした用ひられた経論は仏陀の説法によるもの、人師の著作になるもの、種々多量であるが、その中で法華経が最も広く用ひられたと認められる」（高橋俊乗 1944：335）ことを、多くの資料に基づいて実証的に究明した論文である。

まず聖徳太子が「仏教の真精神を明白に表現したる經典として僧俗を通じて愛誦すべき經典として法華経を選択せられた」（高橋俊乗 1944：339）ことを取り上げ、太子がいかにか法華経を重んじたかを、『日本書紀』『法隆寺伽藍縁起并資材帳』『扶桑略記』『歴代三宝紀』『開元釈教録』の資料で裏付けている。その後、皇室において法華経が尊信されたことを鎌倉時代までさかのぼって論証している。次に『日本靈異記』『日本往生極楽記』『拾遺往生伝』などの資料によって、民衆の間にも法華経信仰が行われていたことを例証している。

さらに法華経28品を中心とする「平家納経」33巻中、法華経法師品第十、法師功德品第十九の2巻は、平清盛の自筆であること、源頼朝もまじめな法華経受持者であったこと、楠木正成も代表的な法華経の行者であったこと、そして観阿弥・世阿弥も法華経の信仰者であったことを述べている。

次に高橋は多数浩瀚なる大蔵経の中で、法華経が最も多く受持読誦されたことを4つの統計資料によって示している。その第一は、文部大臣が1897（明治30）年以来年々指定してきた国宝の中には、仏典が多量に含まれている。これを經典別に分類したものである（第1表）。その第二は、田中塊堂の『古写経綜鑑』を資料として、国宝と非国宝とを問わず古写経について統計を

とったものである。これは平安時代までを主として網羅したものである（第2表）。第三は、吉澤義則著『日本古刊書目』を資料として、近世初頭までの古刊本について調査したものである（第3表）。第四は、江戸時代の商品としての書籍目録のうち京都尚古堂主人、田口明良が手控として作った『典籍秦鑑』（1841（天保12）年）を分析して作成したものである（第4表）。

これらの4つの統計資料は、高橋が大乘仏教經典の中でも法華經が最も多く読誦されているこ

表1 大乘仏教經典のもつ日本人形成の教科書的意義

第1表		第2表		第3表		第4表	
法華經	66点	大般若經	142点	法華經	114点	法華經	43点
大般若經	14	法華經	83	大般若經	31	首楞嚴經	41
金光明經	13	華嚴經	33	阿弥陀經	26	碧巖録	21
般若心經	11	瑜伽師地論	25	成唯識論	25	華嚴經	17
觀普賢經	10	般若心經	21	梵網經	21	俱舍論	17
無量義經	8	金光明經	17	觀無量壽經	18	選択集	12
華嚴經	7	唯識論	16	般若心經	16	唯識論	9
涅槃經	6	阿弥陀經	15	無量壽經	14	觀無量壽經	9
金剛般若經	5	理趣經	10	華嚴經	12	浄土論註	8
宝篋印陀羅尼	5	増一阿含經	8	大日經	11	梵網經	7
4点以下略		俱舍論	8	觀普賢經	11	楞伽經	6
		毘婆娑論	8	仁王經	11	天台四教儀	6
		涅槃經	7	無量義經	10	涅槃經	5
		智度論	7	理趣經	10	4点以下略	
		維摩經	6	孟蘭盆經	9		
		大日經	5	金剛般若經	9		
		金剛般若經	5	首楞嚴經	9		
		宝篋印陀羅尼	5	金剛般若經	9		
		4点以下略		悉曇字記	8		
				選択集	8		
				金光明經	7		
				藥師經	7		
				瑜伽師地論	6		
				釈摩訶衍論	6		
				涅槃經	5		
				日藏經	5		
				三教指帰	5		
				往生要集	5		
				4点以下略			

この表は、高橋俊乗がまとめた第一表～第四表のうち、出典数が4点以下を省略して、筆者が作成。『龍谷大学紀要』第1巻, pp. 353～359参照。

とを実証的に明らかにした証拠である。高橋はこれをもって法華経が日本人形成の教科書として用いられたと考えたのである。この統計資料の作成は労作であるので、次に引用することにした。 (高橋俊乗 1944 : 353-359)

2. 大乘仏教經典が日本人形成の教科書的意義を有することを示す統計資料

高橋俊乗の教育についての定義は簡潔である。すなわち、教育とは「模範から模倣への推移或いは模範と模倣との関係」(高橋俊乗 1933 : 1)であると捉えている。したがって大乘仏教經典を人間形成の模範となる教科書として捉え、どの經典が最も多く模倣されたかを実証的に明らかにすることによって、法華経が最も日本人形成の教科書的意義をもつと結論付けたのである。しかし、この研究方法では、なるほど法華経が日本人形成の教科書的存在として広く影響を与えてきている事実は明らかにされたが、では一体どのような影響を与えたのであるか、という人間形成の内実は解明されないままである。そこで法華経学習によってどのような教育効果が見られたのかを明らかにするために、法華経学習の体験談を集めた『大日本国法華経験記』³⁾を資料として、次に考察することにした。

VI 『大日本国法華経験記』にみる法華経研鑽による人間形成

1. 『大日本国法華経験記』の概要

この書物の著者は、比叡山横川的首楞嚴院沙門鎮源である。伝は全く分からない。本書は序に「長久之年(1040-1044)季秋之月記」(続群書類従第8輯上:111)とあり、内容上これと矛盾するものがないこと、また巻下の信誓阿闍梨(87)⁴⁾が「長久4年、年70、猶在世」(続群書類従第8輯上:175)と記されていることなどから、本書は長久4(1044)年に書きあげられたものと思われる。

自ら天台宗の僧として法華経經典への信仰に厚かった鎮源は、その序の冒頭において法華経は、釈尊の久遠の本地を明らかにした經典であり、一切衆生が悉く成仏できることを説いたもので、その徳は峨峨としてそびえ、あまねく人々の仰ぎ見るところであり、その靈妙なる働きは四海にわたって厚い恵みをもたらしている、と述べ法華経の力用を讃嘆している。

鎮源は、法華経の修行によって靈験を得たという事例を、都鄙、遠近、緇素、貴賤を問わず129人集録した。その中には聖徳太子、行基、最澄なども含まれている。これらの人物が大乘仏教經典である法華経の修行を通して、人間形成の上においてどのような影響を受けたのか、について考察することにした。

2. 法華経研鑽の動機となっている愚の中の極愚の自覚

聖徳太子によって展開された法華経の一大乗の精神を、さらに発展させその後の鎌倉新仏教の

発生の基盤を作ったと考えられるのが最澄（767–822）である。『大日本国法華経験記』には比叡山建立伝教大師として、その願文が紹介されている。この願文には最澄の発心の様子が切々と表されており、見る者をして道心を起こさずにはおかないものがある。すなわち、「悠悠三界純苦無安也。擾々四生唯患不樂也。」（続群書類従 第八輯上：117）と述べ、まずこの世界は苦であることが深く自覚されている。それは「風命難保，露体易消」（続群書類従 第八輯上：117）いものであるという無常観から生じている。しかるに得難き人身を得て「生時不作善死日成獄薪」（続群書類従 第八輯上：117）るのである。また、「無因得果無有是処，無善免苦無有是処」（続群書類従 第八輯上：117）ということは明らかなことである。翻って自分の行いを見るに社会から衣服，飲食，寝具，医薬などの供養を受けるだけで、何ものをも施していない。未曾有因縁経には施す者は天に生まれ、受ける者は地獄に入ると説かれている。ここに「愚中極愚，狂中極狂，塵秃有情，底下最澄」（続群書類従 第八輯上：117）とわが身を反省した最澄は、我が身は一切受けず、すべてを衆生に施していく決意をしたのである。

さらに彼は、解脱の法味はただ自分一人だけでは飲むまい。安楽の果はただ自分ひとりだけでは悟るまい。すべて法界の衆生とともに妙覚に登り、法界の衆生とともに法味を服そうと決意する。この決意のもとに最澄は法華経研鑽に没頭していったのである。

3. 法華経の経力と修行者の信力の感応道交による人間形成

最澄における極愚の自覚が法華経研鑽の発心の動機になっていることをみたのであるが、これ以外に『大日本国法華経験記』には、病氣や性格、容姿の悩みを直視し、その原因を自分自身の宿業と受け止めることによって発心がなされている例が挙げられている。ここには仏教的因果応報思想が、人々の内面に深く刻まれて自己形成が行われていることがうかがわれる。自己は無限の過去からの自業の積み重ねによって存在している、ということを教える仏教は、自己変革、自己完成への道もまた、他ならぬ自分自身の中にあることを示しているといえよう。

法華経研鑽による人間形成を考察するには、法華経研鑽を実践した人間の姿勢がいかなるものであったか、ということを手離しては考えられない。『大日本国法華経験記』には、法華経という經典に込められている力用を表現する言葉として、経力、妙法力、験力、妙法威力、持経法力、法華力、一乗力、妙法聴聞威神力などの様々な表現が用いられている。これらの言葉の意味するところは、法華経という經典自身の内に秘められている功德力、人間形成力とみてよいのだろうか。その功德力を最も簡潔に表現した「経力」という言葉を本稿では用いることにしたい。一方、修行する人間の側の力としては、信力という言葉だけが使用されているが、信力は行力と一体となっていると考えられる。

信力とは、法華経を信ずる力、行ずる力ということにほかならないのであるが、これを別の言葉で置き換えるとどうなるであろうか。『大日本国法華経験記』の山城国相楽郡の善根男（105）の信力について述べられている箇所が『今昔物語集』（12巻の第26）ではどのように表現されて

いるかをみることにしたい。「此レヲ思フニ、三宝ノ靈驗ハ目ニ不見給ズト云ヘドモ、誠ノ心ヲ至セバ如此ク有ル也トナム語伝ヘタルトヤ。」(『新訂増補国史大系』第17巻：101-102)と表現され、信力に当たる部分は「誠の心を至す」と言い換えられている。

この「誠の心を至す」という表現を用いて、法華経研鑽による人間形成について考えてみる。誠の心を至して修行者が法華経の読誦や書写などの研鑽に励むことによって、法華経の経力が修行者の身の上に功德となって備わってくる、すなわち人間形成が成就してくる。また、修行する側の信力・行力の強さいかんによって、引き出されてくる経力も変わってくる。引き出された経力の影響を受けて、信力・行力もまた強化されていく。このように経力と信力が相乗的に感応道交することによって、人をして誠の心の人へ、すなわち修行者をして至誠の人間へと形成しゆく力用が法華経經典に込められている、と考えられていたのではなかろうか。

Ⅶ おわりに

本稿は、平成30年8月27日・28日の第12回大巖寺研修会での僧堂体験を契機として、これまで温めてきた仏教と教育についての思索を論文としてまとめたものである。まず、大乘淑徳学園の創立者である長谷川良信においては、大乘仏教經典の研鑽を基盤として、そこから導かれた菩薩道の生涯において、宿願としてきた社会事業実践と淑徳大学の開学に多大な功績を残した。また、長谷川良信の恩師である大正大学教授、渡邊海旭は大乘仏教經典の一代の碩学としての研鑽を基盤に、芝中学校長22年間の教育実践に生涯を捧げ、多大な教育的感化を及ぼした。

この二人の師弟に共通していることは、大乘仏教經典の深い研鑽とそこから汲み取られた菩薩道の精神をもって教育実践に不朽の功績を残したことである。唐澤富太郎は、『教育人物事典』中巻において、「学徳兼備の芝中学校の名校長」と題して、渡邊海旭を高く評価し詳述している。筆者は唐澤富太郎の指導のもとに「仏教と教育」の研究に取り組み、『大日本国法華経験記』に登場する人物の人間形成がどのようなになされたかを、法華経經典の研鑽との関わりによって明らかにしようとした。その結果、法華経經典のもつ人間形成的意義は、經典が内包する経力と人間の側における信力・行力が相互に作用しあい、感応道交することによって、修行者をして至誠の人間へと形成しゆく力用が法華経經典にある、と考えられていたことを考察した。

【注】

- 1) 大乘淑徳学園の学祖は長谷川良信であり、校祖は輪島聞声(1852(嘉永5)～1920(大正9)年)である。大巖寺の参道の両側に仏教者の言葉が「学問の碑」と称する書物型の石碑に刻まれている。校祖輪島聞声の言葉は、「信と忍とは、万業の基礎なり。忍の徳たるや、一切の事業を成就す。」とある。北海道松前藩福山町の輪島屋5代目太左衛門の3女として生まれ、幼少より仏教に親しみ、1896(明治9)年父母の許を得て上京、回向院の福田行誠を生涯の師と仰ぎ得度した。幼名こ子を聞声と改め、本所感応寺に居住した。女子教育を志し1892(明治25)年に伝通院山内に淑徳女学校を設立し、仏教主義女子教

育の先駆者としての生涯を送った。ここに大乘淑徳学園の淵源がある。

- 2) 唐澤富太郎 (1911-2004) は、文学博士の学位論文「中世初期 仏教教育思想の研究—特に一乗思想とその伝統に於いて—」(1954) 607頁、において「もともとこの研究はやむにやまれぬ自己の主體的な内面世界の形成の問題として、既に16年前に始められたものであったが、次第に学問研究の対称として展開したもの」(同：3)であることを明かしている。この16年間にわたる仏教の追体験 (Nach-erleben) による求道は、真剣そのものであった。彼は偉大な宗教的人間を取り扱う研究においては、「研究者は、あくまでも人間として、体当たりのこれ等の思想家を理解して行くものでなければ十分であるとは云い得ないと考える。」(同：25) とその信念を吐露している。唐澤はこの16年間に聖徳太子・空海・最澄・空也・恵心・良忍・法然・親鸞・栄西・道元・日蓮等の事跡を訪ねている。そして、聖徳太子によって明らかにされた一大乗の思想の伝統的背景から「浄土的一乗思想、曹洞的一乗思想、法華的一乗思想」(同：1) の3つの類型に凝集し、「更に横に三者を比較対照してここに類型的教育史、比較教育科学的な研究方法を用ひ、教育理念、教育形態、教育方法、教育対象等の極めて典型的な類型的研究をなし、教育思想史研究の一つの新しいタイプを打ち出そうと試み」(同：2) たものであった。
- 3) 『法華験記』の題名は、続群書類従第8輯上の目次には『本朝法華験記』とあり、本文の最初には『法華験記』と掲げられている。そして序文には「大日本法華験記序」とあり、上・中・下巻のそれぞれの目録には「大日本国法華験記」となっていて一定していない。校注者 井上光貞による日本思想体系7 (1974) 岩波書店では、「大日本国法華験記」が採用されているので、本稿においてもこれにならうことにする。
- 4) 87という番号は、「大日本国法華験記」に登場する129人の人物の目次に付けられているものである。

【文献】

- 唐澤富太郎 (1984) 「聖徳太子—日本文化の祖、日本教育の源流—」
 唐澤富太郎編著『教育人物事典』上巻、ぎょうせい。
 壺月・渡邊海旭 (1933) 『壺月全集』上下、壺月全集刊行会、大東出版社。
 坂本幸男・岩本裕 (1962) 訳注『法華経』上、鳩摩羅什訳、妙法蓮華経、岩波文庫。
 『大正新脩大藏経』(1925) 第9巻、大正新脩大藏経刊行会。
 淑徳大学50年史編纂委員会 (2015) 『淑徳大学50年史』出版文化社。
 『新訂増補国史大系』(1931) 第17巻、吉川弘文館。
 『続群書類従』(1912) 第8輯、上、伝部。
 高橋俊乗 (1933) 『日本教育文化史』同文書院。
 高橋俊乗 (1944) 「世俗教育の教科書として用ひられたる法華経」『龍谷大学紀要』第1巻。
 土井 進 (1984) 「貝原益軒—子女の教育法を説いた「和俗童子訓」の著者—」
 唐澤富太郎編著『教育人物事典』上巻、ぎょうせい。
 土井 進 (2017) 「英国人外交官W.G.アストンが高く評価した貝原益軒の道徳教育論の特質—“A HISTORY OF JAPANESE LITERATURE”を資料として—」
 平成29年度 総合福祉研究 第22号、淑徳大学社会福祉研究所、pp.107-114。
 長谷川匡俊 (1992) 『トウギャザー ウィズ ヒム—長谷川良信の生涯—』新人物往来社。